氏　　名	大竹明香
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第 583 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	『源氏物語』の語りと表現―明石の君を中心として―
審 査 委 員	（主査） 井野　葉子（立教大学大学院文学研究科教授） 加藤　睦　（立教大学大学院文学研究科教授） 小嶋　菜温子（立正大学文学部教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

序

第一部　明石の君をめぐることばと神話

　第一章　『源氏物語』における「みるめ」表現―明石の君を中心として―

　第二章　歌語「みるめ」表現考

　第三章　明石の君と衣通郎姫―松風巻における二条東の院と大堰の意味するもの―

第二部　『源氏物語』における「母」

　第一章　藤壺の母呼称―母としての立場から―

　第二章　『源氏物語』明石の君と「母」の空白―海幸山幸神話との比較から―

第三部　明石の君から浮舟へ

　第一章　浮舟と「数ならぬ」・「身のほど」の意識―明石の君・中将の君をとおして―

　第二章　浮舟と織女―明石の君との比較から―

　第三章　明石の君から浮舟へ―うき舟・うき木・小町―

結

既発表論文との関連

主要参考文献一覧

使用本文一覧

（２）論文の内容要旨

本論文は、歌語や鍵語による解読や、和歌や神話などの先行作品の引用表現の分析を通して、『源氏物語』の語りと表現の有り様を考察するものである。第一部の第一章と第二章では、平安初期から平安中期に至るまでの歌語「みるめ」の表現史を明らかにし、『源氏物語』の明石の君をめぐる「みるめ」表現の特異なあり方を浮かび上がらせる。第三章では、明石の君が二条東の院に入らないという物語展開が、衣通郎姫の神話の話型を踏まえていることを新たに指摘している。第二部第一章では、藤壺が「母」と呼ばれることの意味を析出し、第二章では、明石の君が「母」と呼ばれる意味について論じながら、海幸山幸神話の話型を踏まえつつも異なる物語展開になっていく独自性についても追究している。第三部第一章では、鍵語「数ならぬ」「身のほど」に注目し、自身を「数ならぬ身」と捉えず、「身のほど」との意識を持たない浮舟の有り様を明らかにする。第二章では、七夕伝説を引用した中将の君の心内語が、浮舟が二人の男のもとへ自ら出向く召人となる予言になっていることを明らかにしている。第三章では、歌語「うき舟」「うき木」が明石の君と浮舟の不安定さを象ることを考察する。これらの論文を通して、明石の君を中心とした、藤壺や浮舟の物語の語りと表現の特質を分析する。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は、歌語や鍵語による解読や、和歌や神話などの先行作品の引用表現の分析を通して、『源氏物語』の明石の君を中心とした藤壺や浮舟の物語についての、語りと表現の有り様を考察するものである。これまで『源氏物語』における鍵語による作品論や先行作品の引用論は多くの研究者たちによって議論されてきているが、まだまだ追究し尽くされてはいない。本論文は、それらの従来の方法論を継承しながら、歌語や鍵語の用例を丁寧に取り上げて分析したり、引歌表現や神話の引用表現の有り様を考察したりしながら、明石の君や藤壺や浮舟の物語の特徴を浮かび上がらせている。明石の君をめぐる歌語「みるめ」表現は負のイメージのある言葉を伴っていること。子を手放す明石の君には神話の豊玉姫の話型が、紫の上の嫉妬を恐れて二条東の院に入らない明石の君には神話の衣通郎姫の話型が踏まえられていること。同じ「母」呼称でも、政治的な後見人の意味合いを持つ藤壺の場合と、明石一族の血脈を表す明石の君の場合とでは、大きく意味合いが異なること。歌語「うき舟」「うき木」や鍵語「数ならぬ」「身のほど」や、七夕伝説引用や小野小町の歌の引用表現に注目すると、明石の君と浮舟とが同じ表現で繋がりながらも差異を生み出していること。これらのことを本論文は明らかにしている。

（２）論文の評価

まずは、明石の君の物語が衣通郎姫の神話と海幸山幸神話の話型を踏むことを新たに指摘したのは大きな達成である。次に、藤壺と明石の君の母呼称を別々に取り上げてその特徴を明らかにした功績も大きい。母呼称については、従来『源氏物語』全体において論じられることはあっても、個別の女君について論じられることは皆無だったからである。本論文によって個別の女君によって母呼称のあり方が大きく異なることが解明されたので、今後、他の女君たちの母呼称のあり方が問われることとなろう。母呼称という大きな鉱脈を探り当てた本論文は高く評価できる。次に、歌語「みるめ」表現から源氏に捨てられる明石の君の運命が暗示されることや、浮舟と共通する歌語や七夕伝説引用などの表現から、明石の君の身の不安定さが浮舟並みであることが明らかにされたことの意味も大きい。明石の君は賢く身を処して栄華を獲得することから、身分の低さからくる立場の不安定さが印象に残らない女君であるが、本論文が浮き彫りにした明石の君の不安定さは、従来の明石の君の人物像を刷新するようなインパクトを持っていて意義深い。今後の課題としては、明石の君の物語が神話の話型を踏むことの意味をさらに追究すること、他の女君の母呼称についても論じること、引き続き鍵語による丁寧な読みを続けることなどが挙げられよう。

以上の理由から、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。